

地域と学校 その11

2年目の建設委員会～体育館・プールの計画

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

昨年10月に挙行された100周年記念式典と並行して編纂が進んでいた「石榑小学校百年史」が完成し、手元に届きました。260頁にわたる労作には過去の記録だけでなく、その時々<sup>いしぐれ</sup>の記憶が記されています。思い出話は、各地区の老人会とともに開催された「小学校の思い出を語る会」で収集されました。また、明治期に建てられた木造校舎の一部が、今も現存すること。私も初めて知りました。

さて今回は、2年目に突入した建設委員会の話です。

建設委員会の再開

1年目(2002年度)の建設委員会は、18回の会合と、2回の公開ワークショップで精力的に議論を重ねました。この1年で新しい石榑小学校の校舎の考え方はまとも、設計図書が完成しました。しかし、体育館・プールの工事、そして屋外環境整備は第2、第3工期のため、場所は決まっていますが具体的な検討はこれからです。

2年目の第1回目、通算19回目の建設委員会は6月6日に開催され、今年度(2003年度)は体育館とプールの計画検討と管理運営方法が議論の中心になることがまず確認されました。また、昨年度にまとめた新校舎の建設工事が秋口に始まることが知らされました。完成予定は2004年12月。あと1年半です。「そんなに時間はないよな、管理運営の話は早くやらないと」。ある委員がつぶやきました。

再開された建設委員会ですが、雰囲気<sup>きふい</sup>が少し変わりました。委員が一部入れ替わったからです。PTA役員が変わったことで新しいお父さん、お母さんがメンバーになり、自治会長委員も3名変わりました。そして、校長先生も交代です。かつて教頭先生として石小に赴任されていたKs先生が着任されました。Ks先生、石小にカムバックです。昨年1年間、熱心な議論が何度も繰り広げられていたことを知っていますので、皆さん緊張の面持ちです。

管理運営は地域で議論しよう

昨年度から宿題になっている地域利用ゾーンの管理運営については、第20回委員会で委員長から「中心的な事務局をつくってPTAが担ってはどうか」という提案がされましたが、「地域が利用することなのだから、地域が主導権を持つべき」という声<sup>こゝろ</sup>が多数を占めました。また体育館とプールも地域利用の対象ですから、「設計と切り離れた議論はしない方がいい」「要望がないと設計もできないよ」という意見もありました。

また、1回目の委員会では「1年目は設計事務所で議論をリードしてくれたけど、今年からは地域がリードしないと」という声もあがりました。意見を言うだけでなく、それをどうまとめて実現にもっていくのか。それを地域メンバーが考えないといけな<sup>い</sup>という意識の芽生えだったのでしょうか。地域が主役の管理運営を地域がどう受け止め、行動するのが問われる1年だからこそ、発せられた意見<sup>いけん</sup>だったのでは。

とりあえずの結論としては、建設委員会の中に管理運営

の委員会を設けて、体育館・プールの計画作業を見ながら並行して議論を進めていくことになりました。

各地の事例に学ぶ

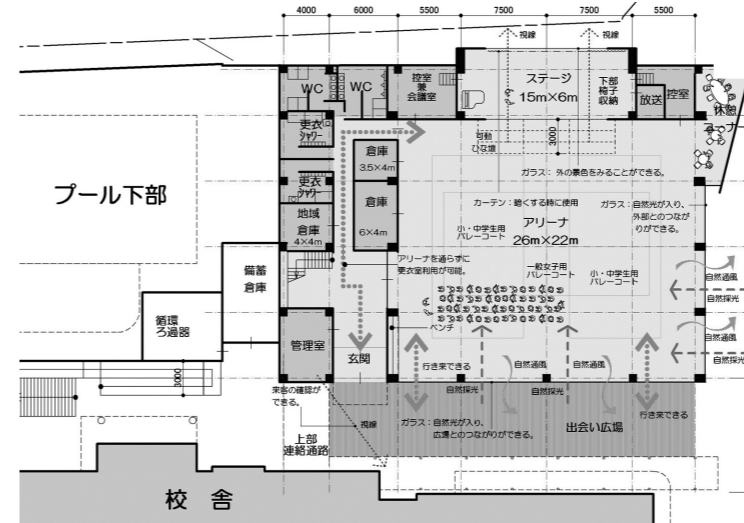
さて、2004年度前半の中心議題は体育館・プールの計画です。既に校舎の計画時に決定されていた前提条件があります。①位置は校舎北側、②校舎と体育館プールの間が開放通路になるので、校舎とは2階でつなぐ、③体育館の地盤は校舎の地域ゾーンと同じ1階、プールは2階、の3点です。

専門家はともかく、一般の方々にとって学校の体育館については、楽しんだスポーツやイベントの記憶はあるけれど、建物は閉鎖的でガラ<sup>ん</sup>としていて冬は寒い、といった印象があるくらいが普通<sup>ふつう</sup>のようです。そこで設計事務所から各地の体育館8つが紹介されました。木造で屋根架構が内部で見える例、アリーナの床レベルで開口部が設けられて外部との連続性が高い例、ステージが可動式で必要な時だけ設けることができる例、などです。

また第21回委員会は、バスに乗って愛知県旭町(現豊田市)の旭中学校へと見学に出かけました。三河の山あいにある学校で、土地にかなりの高低差があり、また中庭もあって、石小の新校舎との関連性も感じられました。体育館は集成材によるアーチ架構で構成され、体育館のステージは剣道場と兼用というユニークなものです。プールも体育館と同様な架構によって被われた屋内プールです。そして、こも地域住民との話し合いを重ねて完成した学校でした。しかし、そのメンバーが現在では学校とあまり関係していないことや地域利用が十分



・愛知県旭町(現豊田市)立旭中学校の体育館  
写真奥のステージは剣道場を兼ねるため、ステージとしては奥行きが深くなっています。



・体育館の空間構成(最終案)  
3方から視線が通る開放的な構成です。  
(石本建築事務所提供)

にされていないと聞いて、残念だと感想を漏らす方もいました。

私も参考例を2つ紹介しました。そのうちの一つは熊本県小国町の北里小学校の体育館です。この体育館は屋根がフラットで比較的天井高が低い体育館です。また小国町は杉の産地で有名です。細い木のルーバーが壁と天井を被い、その先にあるトップライトから光が降りてくるという空間です。またこの学校も地域利用のための部屋があり、校舎とそれをつなぐ通路が体育館のアリーナを巻くようにして取り付けられています。ですから、一般的な体育館のように対称形の平面でガラ<sup>ん</sup>とした空間ではありません。さらに、この体育館の計画も、住民と一緒にワークショップ形式で検討されていました。

この体育館を紹介する冊子に、PTAの副会長さんが次のような内容の言葉を残しています。「最初はバレーボールができるような天井が高く広い体育館がよかったけど、話し合いを重ねるうちに、地域の集まりの場として使いたい、外部の人たちも使えるといいのでは、という考えになってきた」と。そして、「設計者は出来上がったら終わりですよ、でも使っていくのは私たち。設計者も一生懸命考えてくれました」と結んでいます。私がたまたま直前にこの学校を見学したことから、体育館の考え方はいろいろありますよと言いたくて紹介しました。今振り返ると、建設委員会が当時模索していたことを実現した地域と学校でした。



・熊本県小国町立北里小学校の体育館  
末廣香織氏設計による。  
アリーナ周辺を回廊が取り巻き、円状のトップライトから光が注ぎ込むのが特徴。

明るく開放的な体育館に

第22回委員会では様々な意見が飛び交いました。旭中学校を見学した影響からか、屋根つきプールを期待する声や、水があるためか「風水は大丈夫?」という意見も(笑)。一方で、安全面や衛生面の対応を考えるとプールの地域開放はハードルが高く、断念することになりました。

第23回委員会では検討案が2つ用意され、議論しました。ステージがきちんと取られた比較的一般的な案と、校舎との間の地域開放通路に面してステージ兼ラウンジとなるような案です。どちらもプールとの間に更衣・シャワー・管理室などを置き、体育館はできるだけ開放的にし、特に地域開放通路から直接行き来できるように考えられています。

屋根は校舎に連続的に架かるポルト状の屋根に対応するように、張弦梁で高さを抑えながら、校舎の屋根形状に似た柔らかい曲線を描く形になりました。また、ハイサイドライトをとることで、体育館特有の暗さ<sup>くらさ</sup>も上手く解決できました。ステージについては、体育だけでなく文化的行事も行うために設置することになりましたが、最終的には北側に置くことに。ステージの奥は壁ではなく、開口部になりました。

竣工式の出来事

校舎の完成時のことはまだお話ししていませんが、体育館・プールの竣工式の様子を先に話してしましましょう。竣工式は2006年3月12日に建設委員会主催で行われました。明るいな<sup>あ</sup>という感想を持つ人が多く、開放的な雰囲気<sup>きふい</sup>が好評でした。

竣工式の式典の間、ステージ後ろの開口部は全開でした。そのため、建設委員長や校長先生、来賓の方が挨拶や祝辞をされる際、そのちょうど後ろの体育館北側の道路を、式典へと急ぐ参加者が歩きながら「今何やってる?」という表情で覗きながら通り過ぎていきました。このなんともリラックスした雰囲気に、建設委員会の方々が目指していたのはこういうことだったかと、私は改めて納得しながら心の中で拍手をしたのでした。



・体育館・プールの竣工式典  
建設委員長の挨拶をステージ外からのぞいている地域の方々のしぐさに、会場から笑い声も。

〈参考文献〉

くまもとアートポリス事務局『くまもとアートポリスニュース第28号』  
2003年3月